

## 自著紹介

『日韓近代文学の交差と断絶——二項対立に抗して』  
明石書店、2013年

人文学系教授 鄭 百秀

本来恣意的な想像態に過ぎない、文学・文化の境界が、日本と韓国の間には、あたかも国境という領域概念のように、絶対視、当然視されている。その境界こそが、いわゆる国民文学・国民文化という観念が実体化される際の、先行の条件であることはいままでもない。本書は、副題に示されている〈日韓の国民文化における二項対立的境界のイデオロギーに抗する〉という問題を、具体的な文学・文化テキストの読みを通して、追求したものである。そもそも日韓の近代の文化にはいったいどのような〈二項対立〉が構築されてきたのだろうか。

まずは、もっとも基本的な、空間的分節によるもの。われわれの文化領域と彼らのそれを区画し、その分割を実体化することによって成立する二項対立がそれである。すなわち、〈韓国人＝韓国語＝韓国文化〉と〈日本人＝日本語＝日本文化〉という対称的領域を想定し、そこでそれぞれ互いを対照的に捉えることによってその内部を画一的な統一体として構築するのである。ここで注意しなければならないのは、その境界の想定と内部の構築が、経験的な認知作用ではなく、先験的な観念作用によって行われるということである。日韓の近代文学・文化を振り返ってみると、たとえば、朝鮮人作家の二言語文学、朝鮮文壇の日本人作家、旧植民地出身作家の日本語創作などの、言語横断的な、文化混淆的なテキストは、経験上にはいくらかでも見出すことができる。しかし、それらのテキスト群——本書の分析対象である——が、いままでの日韓近代文学・文化に対する学問研究やジャーナリズム言説においては、国民文学・文化の内部を構築しようとする二項対立のイデオロギーによって、非規範的、非中心的、あるいは例外的なものとして扱われるようになったのである。

それと同時に、いままでの研究言説は、意識的であれ、無意識的であれ、時間的分節による二項対立的カテゴリー化を企図する。植民地期以後のありとあらゆる国民文学・文化構築の言説は、過去の自国文化を正当化するために、歴史と伝統に主張の根拠を求めているのだが、その際、〈正当〉な国民文化に必要な時間と不要な時間が分別されるということだ。すなわち、まず、日本語・日本文化によって支配されていた墮落した時代としての植民地期と、そして、朝鮮語・朝鮮文化が解放された植民地以後に二分化し、その境界を「解放」、「光復」、「独立」などの言説を通して明確に固定化しているのである。しかし、こうした時間的分節もまた、空間的次元の二項対立と同様、非現実的な、先験的な観念によって行われていることはいままでもない。たとえば、植民地期に行われた朝鮮教育令の度重なる改定や実施からも推測できるように、社会各方面における朝鮮文化の日本語化は、長い時間の訓練、修正、そして強化によって

進められていた。そして現実的には、そうした朝鮮文化の日本語化という歴史的状況から、解放以後の韓国語文化の脱植民地化が一気にまた明瞭に成し遂げられたわけではない。こうした文化的、制度的な条件を考えれば、いままでの文学・文化研究言説で固定化されてきた時間的分節が経験上の事実を無視していることは確かなのである。

こうした非経験的、非現実的、そしてイデオロギーの企画によって構築された〈二項対立〉を、本書の議論の方向性に合わせて批判的に把握してみると、次のようになる。第一、自民族共同体の精神文化に正しい、善い、美しい意味を与えることを最優先する点において、それは、他者不在の文化特殊主義であり、第二、現在の新しい国民文化の構築イデオロギーによって過去の植民地期を断絶し、排除している点において、非反省的な現在中心主義であり、第三、ポスト、トランス、マルチ、インターなどの接頭語がつく同時代（二一世紀初頭）の思想的、知的潮流に逆行している点において、反時代的、非連帯的な孤立主義であり、第四、国民共同体の利害を対称に規定——たとえば、親日か反日かなどの二項対立——し、前者を断罪するすべての権限を今・ここ・私（われわれ）に与えている点において、反倫理的な歴史修正主義であり、そして第五、植民地支配・被支配を制度的に、日常的に、また心理的に経験する中で民族主体の欲望が形成されていたにもかかわらず、民族の共同体意識の先験的自立を想定している点において、自己欺瞞、自己否認、あるいは自己忘却でもある。

それでは、いままでの研究言説では主に非国民的な精神の文化表象などとして解釈されてきた、日韓の言語横断的、文化混淆的文学・文化テクストを今いかに読むか。いいかえれば、それらのテクスト群に対する読みの現在の意義とはいったい何だろうか。ただ単に、排除されてきたテクストを再解釈することによって、そこから国民文学・文化を正当化する要素や文脈を確認することや、テクストに内在する多層的、両価の意味を読み取ることなどを、研究の意義として決めつけることはできない。日韓文学・文化の横断的、混淆的テクストのもつ一義的な価値は、逆説的にも、植民地以後の国民文化論の二項対立的認識によって裁断されてきたもつとも顕著なテクストであったという点に見出さなければならない。すなわち、それらのテクスト群は、いままでの研究が過去と現在、親日と反日、そして協力と抵抗を断絶させ、肯定的価値を構築するために否定的価値を排除する際、その後者に位置づけられていた典型的なテクストであったのである。したがって本書の読みがめざすところは、日韓文学・文化における横断的、混淆的テクストを、いままでの研究言説によって規定されていたように、清算すべき過去の残滓として捉え、最終的に報告することではない。むしろ、現在の日韓国民文学・文化言説においてますます猛威を振っている、境界構築のイデオロギーの起源や形成の過程を明らかにする契機としてそれらのテクストを捉えようとする。つまり、植民地以後の植民地文化研究の自民族中心主義の根幹をなすこの二項対立に抗していくためには避けて通ることができないのが日韓の言語横断的、文化混淆的テクストの再解釈なのである。

本書は、こうした問題意識によって、過去五、六年の間に書き溜めた、本学の文学研究者の同人誌『桜美林世界文学』に発表した論文を中心に構成されている。なお、取り上げる主なテクストは、以下の各章のタイトルに付記されている。

- 序章 <sup>ポスト・コロニアル</sup> 植民地以後の文学研究批判——境界の自壊的解体のために
- I 「本ブラ」と植民地モダニズム作家
- II 言語の横断と物語世界の変化——李光洙『萬爺の死』
- III 境界を描く——金史良『土城廊』
- IV 躲される『國民文學』——金史良『ムルオリ島』
- V 「外地文学」の植民地主義——小尾十三『登攀』
- VI アイロニーとしての「親日」——李光洙『加川校長』
- VII 物語られる「創氏改名」
- VIII ディアスポラの祖国語——李良枝『由熙』